
秋彩

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋彩

【著者名】

貂寧

N2329D

【あらすじ】

友達をなかなか作れない女の子と・・・転校してきた男の子の・・・お話。

秋は、たくさんの色にあふれている。

紅葉して赤や黄色になつた葉、教室から校庭を見渡す。

松虫が鳴いていて、もう秋なのだとつくづく実感する。

「何してるの・・・？」誰かが声をかけてくる、誰だらつ・・・？

振り返つて確認する・・・！

その声の持ち主は、気になつている女子だった。名前は他達代沙たくばよなだ。

・・！

「えっ、なつて人間ウォッキング・・・です・・・」

彼の名前は、開田武寛かいだたけひろ

小学校の頃から気になつていた・・・だけど、告白するチャンスもなくて

そして小学5年の夏休みの前に転校していった。

住所も聞かなかつたから・・・いつも気になつては、悲しくなつた。

そして、地元の中学にあがつて2年目の1学期の微妙な時期に転入生として

やつてきたのが武寛だつた。

そのとき、とつてもうれしくて・・・泣きそうになつた。

そして今日、やつと話しかけることができた・・・。

返事をしてくれたから・・・うれしかつた・・・。

「人間ウォッキング？どういうもの・・・？」質問をしてしまつ・・・

。。

「人間を観察するものです・・・。よく見てください、あつ、たとえば・・・あそこ」の木下にいる中一の男子・・・結構おもしろいですよ・・・。」

私は、言われたとおりに見てみる・・・。どうが面白いのだろう、私にはただ、人がありのように動いているようにしか見えない・・・?

「わからんないな・・・何所がいいのか・・・私には、どう見ても人が働き蟻のように動いているようにしか見えないな・・・」

「そうですか・・・それは、ざんねんですね・・・」

少し落ち込んだ、まあ人間ウォッチングはこの遊びだからな・・・。彼女は、暇なときどんな遊びをするのだろう・・・?
「あの、他窓さんは、暇なときどんな遊びをするのですか・・・?」「えつ、代沙で、いいよ・・・。えつとね、今頃はペン回しがな・・?結構面白いよ。」

「ペン回しとはシャーペンとかを掌の上で回す遊びですよね・・・。」

「やうだよ、ヒルヒルで開田くんの」と窓つて呼んでもいいかな・・?」

「べつにいいですけど・・・。」

内心、うれしかった。俺のことを親しげに寛つて呼んでくれるのは、代沙だけだった。

「あのやーまた、色々と話をしたりしてもいいかな。席も近いんだ
し···」

彼ともうと話がしたかったが、昼休みは短いのでゆっくりとはして

いられないけれど···

きょうぐらには、いいのかな···?

「はい別にかまいませんよ···だけど、机で寝ていても起きま
じかないでくださいね···」

そう言い終わるまえにチャイムが鳴る。校庭にいた生徒たちは次
々と校舎の中に入つていった。

「じゃあまたあとでね···」

「そうこうと、代沙は自分の席に戻つた。

俺も席に戻ることにする···。と黙つても窓際の一一番後ろの席だ
から振り向くとすぐだった。

放課後の教室で、俺は思った。もし代沙が、人間ウォッキングを好きになつてくれたら・・・
どれだけ良いことなのだろう・・・。

少し肌寒い教室で、一人だつた俺を救つてくれたのは、代沙だつた。転校をしてこの近くの小学校から遠くの都会に行つたとき、俺はいじめにあつた・・・
自分で言うのも恥ずかしいぐらいの苦痛を身体に受けそして、ここに戻つてきた。

最初は、すごくうれしくて少しばかりは、友達ができるだろうと期待した。だけど、現状は全く違つた。同じ小学校の人は半分くらい別の学校に行つていてその方に小学の頃の友達がいて
今いる中学には、友達といえる友達がいなかつた・・・。
友達を作る勇氣もない俺に、声をかけてくれたのは代沙だつた。

本当に、うれしかつた。いつも明るくて、活発で友達もたくさんいるんだろう・・・。

私は、なかなか友達が作れない・・・この学校には、頼れる友達が2・3人いるかいないかのところだつた・・・
少し寂しかつた。泣くときも時々あつた。

だけど今日、初めて彼に話しかけたことによつてその気持ちが薄くなつていつた。。

悲しくはなくなり、彼と話したことで余計につれしかつた。

もつと長く、もつと親しくなりたい・・・もつともつと・・・

そつ思いながら歸つについた、夢の中でも彼に会えますよつて・・・

早朝、あまりにも早く起きてしまつた俺に、冷気が襲いかかる・・・
。

今日も、彼女と話ができるだらうか・・・

隣の席だから右を向けばすぐなのだが・・・話しかける根性がない・
・・。

ああ・・・今日も話しかけられますよつて・・・神様よろしく！
そう、こうじうときだけ、神頼み・・・日頃何にもしていないのに聞
いてくれる神様つているのかな・・・？

私は、学校に続く坂道を白い息を吐きながら上つていた・・・。
こつ言つときだけ想う・・・ああ坂道が無かつたらいいのに・・・
傾斜がきつい坂を上つて息を切らすのが、

毎日の日課になつてゐるが、2年になつた今でもまだなれない・
。

寒くなつたこの季節には、ちよつと良い体温になるのかもしれない
が・・・

私には、余計な体力の消費になつてゐる。
こんな山の上に中学を作るなよ・・・そつ思いながら上つてこぐ。

教室は、まだ誰も来ていなかつた。今日は、寒さに耐えながら早めに学校に来た・・・。

今聞こえる音と言えば、男子たちが騒ぐ昼休みの音ではなく朝の練習に来た、吹奏楽部の低音楽器の音だけだつた。

今年も、あと4ヶ月となり3年生が受験で忙しそうにしてゐる・・・。

吹奏楽部は、アンサンブルコンテストに向けて曲を練習していくらしい・・・。

テニス部の男子が、テニスコートではしゃいでいる音も聞こえる・・・。

『ガラガラ・・・・』

教室のドアが開いた・・・・

そこから代沙が入ってきた・・・・

「おはよー」

「おはよう」やむこめす・・・・

そういうと、俺の隣の席に彼女は、座つた・・・・。

彼が側にいると何だか落ち着く・・・・

今日も話すことができた、だけでもっと・もっと・話したいよ・・・・
色々・・・・
だけど話し掛けれるのかな・・・・

そう言えれば先生がもうすぐ文化祭だといつていた。

この学校では、どんな文化祭をするのだ？・・・聞いてみようかな・・・

「あの代沙、もうすぐ文化祭だつて聞いたんですが・・・」^はの埴美中は、どんなことするのですか・・・？」

「えつとね、劇とかを体育館で上演したり、あとは、えーと各クラスのバザーや出店、おばけ屋敷・・・私たちのクラスは、何か劇とかをするらしいよ

内容は、今日の学活で決めるらしいから・・・」

「楽しみですね」

「うそ、とっても面白いやつ・・・。」

そうしていのちに、女子の大群が入ってきて朝のホームルームが始まつた・・・。

私は、悩んでいた……どうせ、この気持ちをからじぶつければいいのだろう……？

どうしたら、彼の瞳に映るのだろう……

俺は、今悩んでる。彼女のことば、大好きだ……
しかし、この気持ちをどうやって彼女に伝えればよいかわからない……
・

私は、頼りになる友達に聞いてみることにした。

「稀紗ちゃんヤツホーあのせ……ちょっとこうい……？」

「うんいこよ……どうしたの……？」

「えつとね……私……好きな……人が……できただ
けど……」

「えつ……うそ……それって誰なん……？」

「うんとね……同じ組の……開田くんなんだけど……」

「えつ……うそ……」

「でね……どうやつたら……彼……気付いてくれるのかな……

・と思つて……

「うん……えつと……そうだ、うちの彼氏に聞いて見ちやル……
よしちゃんケー・タイ……もつちょるやんね……」

「うん、もつちょる……もしかして彼のケー・タイ……？」

「そう……じゃけえ……まつちより……」

「うん、じゃあちやんに任せちょくけえ……」

けつこう、相談するといいこともある物だった・・・。
もつと彼のこと知りたいけど彼と親しくならないとダメかな・・・。

俺は、別の学校に行つている友達に相談してみることにした・・・。

ケータイの受信ボックスを開く・・・

『よお・・・元気か 少し、

相談があるんだ・・・

良かつたら返事をくれ・・・。』 送信ツと・・・

数分くらいして着信音が鳴る・・・ケータイをあけて受信ボックスを開く

【よお、開田・・・久しぶりだな・・・

で、なんなんだ、相談事つて・・・】返信をする・・・

『あの方・・・好きな人ができたんだ・・・
でもな・・・俺、そういう経験したこと
が無くってどうしたらいいかわから
ないんで・・・。師匠としてアドバイス
してくれ・・・』返信ツと・・・

数分後、

【いいぞ・・・まずその好きなひとは、
だれなんだ・・・?】

返信『あのさ・・・小学の時一緒にいた
他達なんだけど・・・彼女携帯
持ってるのかな・・・?
もし持っているんだしたら
俺、もうちょっと彼女と親しくなり
たいなって・・・』

数分後返事

【そうだったのか・・・
俺の彼女他達と親しそうだから
きいとくよ・・・】

返信『ありがとう・・・

聞いたら返事よろしく・・・
じゃあ、どつかでまた会おうな・・・』

早く返事が来るといいな・・・

彼氏から聞いた話によると・・・
よつちやんとあの開田くんは、実は両思いだったらしい・・・。

こつなつたら絶対引っ付かしてやる・・・!!

そう思って、彼氏と一緒に作戦を立てた。

まず、うちが、よつちやんを呼び出して・・・

彼氏が、開田くんを連れ出す・・・

理由は、「あなたに、告白したい人がいるんで来て」とか言えればいいだろうか・・・?

そう私たちは、恋のキュー・ピットになるんだ・・・!!

作戦の開始は、2日後の放課後体育館裏・・・良し、けつこつ・・・

作戦まであと1日

「よつちやんよつぽうーー!! あのさー明日の放課後あいてる・・・?
もし良かつたら告つたいてっていう友達がいるんだけどいいかな・・・?
少しだけだから・・・私もよく知らないけど・・・もしかしたら噂の
彼かもよ・・・」

「別にいいよ・・・彼じやなかつたら断るから・・・
「じゃあ、よつちやん・・・明日の4時に体育館前で待ってるから・・・」

その日のメール・・・

『よつちやさん、誘導成功・・・やつちやみゆいひでまさひさゆうさん』

返事・・・【今から・・・だけど、手強そうだな・・・】

『よお、開田・・・』

返信【よお、でつあの件どうなった・・・?】

『まあ明日、教えるから・・・
で明日の放課後埴美中に遊びに行くから、
その時になんか、俺の友達が開田に
告りたいって言つてるから・・・
だけど、詳しいことは後ほどで・・・
もしかしたらあの尊の彼女かもよ・・・』

返信

【別に・・・いこけど・・・
彼女以外だつたら・・・断るから
覚悟しとけよ・・・】

『じゅあ・・・明日、放課後昇降口でまつとけよ・・・
4時ぐらいに行くからな・・・』

【じゅあな・・・】

【稀紗・・・開田〇×だ・・・】
明日の4時に作戦決行だからな・・・
『〇×、幸くんありがとう・・・。いや、明日はなにね・・・。
』

翌日3時50分、予定より早く来てしまったつむと幸くん
幸くんは、ここで待つてこらへりこうちや、みつけられんを体育館の

前で、待つ・・・。

『作戦まであと2分だけど、大丈夫・・・。』

』

【「こっちもOKだ・・・。今、俺の横をターゲット1が通った。】
(ターゲット1は、よつひやんである。)

『じゃあ、もうすぐ来るよつひやんを待つ・・・。』

』

「やつほー・・・よつひやんきてくれてありがと。あともう少し
したら来るから、裏で待つておこうね」
彼氏は、4時10分に裏に来る・・・その時にそっとその場から立
ち去るのだ・・・。

あと1分、開田を連れて体育館裏まで行く・・・

もう稀紗は、いないだろう

「開田・・・あとは、一人で行つてこうー!!

たぶん待つてるのは、あの愛しの彼女だと想つよ・・・

そういうて、俺は背中を押した・・・。

開田は、すたすた歩いて体育館裏に行く・・・

神様よーもし良かつたら彼に告白する勇氣をとれてくれよー

私は、体育館の裏で、誰が来るのが待っていた・・・。
彼だつたらいいな・・・そうして告白してもらえれば・・・。
神様・・・私のところに彼を・・・開田を・・・連れてきてください

俺は、歩きながら裏にいる相手が・・・代沙だつたらと考へている。
・
もし彼女だつたら・・・告白しようつ・・・

3・2・1・さあだーれだ・・・
私は、言葉が出なかつた・・・
ここに来たのが、あの寛だつたからだ・・・ああ、神様ありがとう・
・・あとさつちゃんも・・・

裏で、待つていたのは代沙だつた・・・
もうここで、決心が付いていた・・・告白しようつ・・・！

“あのつ！！”
彼女とタイミングが一緒だつた

「お先にどーぞ・・・」彼女が言つ・・・

「あのさ俺、前から・・・その・・・代沙のことが気になつていて・・・・・

それで、小学の時の友達に相談したんだ・・・。

そこまで言つて彼女を見た・・・彼女は、なぜか笑つていた・・・。

「私もさー、同じようなことなんだ・・・ほんとは、小学校の頃から・・・

気になつていたんだ・・・だからさー本当に、ここに帰つてきてくれたときは、うれしかったんだ・・・。」

「そうだつたんだ・・・で・・・俺が言いたかったことは・・・前から気になつていて・・・もし良かつたら・・俺と付き合つてくれないかな・・・。」

彼女がどんな返事をくれよつとも覚悟は、できている・・・。

「はい・・・ぜひ・・・」

そう聞いたとき・・俺の心に何かが刺さつた・・・

それはキュー・ピットが・・・放つた矢だったのだろうか・・・。

私は、うれしかった。彼が、告白してくれたことが……

そうして私たちは、付き合いだした。

メールの着信音が鳴る

“ 今日、遊び行かない？駅で、10時に会わない…… ”

返信をする

【いいよ・・・じゃあ何所いくん？？】

すぐに帰ってきた

『えつと・・・映画・・・行こうじゅあ、駅で・・・』

私は、このとき彼が何か悩んでいることをメールの調子でわかった
今日にでも、話してくれるのかな・・・？

10時になるまで、あと1時間・・・

今日、彼女に話さないといけないことがある・・・

俺は、ある病気にかかっている・・・

1歩間違えたら死に至る病気、一週間に一回薬を打たないといけない・・・

病名は、血友病、血液を固める因子が、生まれたときから不足していく

血液が固まりにくく

大きな傷口になると、大量出血で死んでしまう病気だ・・・
このことに気付いたのは小学6年の転校していった学校で
殴られたり蹴られたりしてあざがみるみるうちに広がっていったと
きだった。

異常なまでの広がりよつこ、俺自身も不安になつて母に相談した・・・

病院でこの病名を聞いたときそれまで死には無関係だった俺は、死
を知つた。

それを彼女に話さなければいけない・・・
話して、どうしようと言つことではない。
ただ単に話しておきたいだけだった。

駅にちよつと早めに着いてしまつた。

まだ10分もある・・・。

なんだか、寂しい駅だつた。誰もいない。

あと3分俺は、急いでいた。

あと少しあと少しで駅に着く・・・

“ふうーー”車のクラクションが後ろできこえて振り向く

振り向いたと想つた瞬間空に、俺の体が跳ね上がった

気がついたらそこは病院に運ばれる救急車の中で、けつこう血が出ている。

俺の血は、固まりにくい・・・ドバドバ出ている。

赤い血が流れ・・・あたりを見る

まだ意識のある俺に一生懸命に話しかける代沙がいた・・・

意識が遠のいていく・・・なんで・・・
救つてください・・・

わたしは、彼の血で汚れた手を握っている・・・
何で神様は、彼を事故に遭わしたの・・・なんで・・・

医者から聞いた話によると、彼の血は固まりにくい病氣にかかっているらしい・・・

病名は、血友病・・・初めて知った・・・

あと、血液型がABマイナスの少ない血液型らしい・・・

そういうえば、私もAB型だった・・・

病院に着いた。「すみません、私はAB型なんですけど・・・検査してください・・・もしかしたらマイナスかも・・・」

検査結果は、見事マイナス型採血の結果異常なし、輸血に使えるらしい。

もし、この病院の近くにあるマイナスのAB型の血液が無くなつたら私の血液を使ってもらおう・・・そう思つて採

血をする。

手術の結果、寛は、助かった。

全治3ヶ月の大けがだつたけど、輸血の血液のおかげで一命を取り留めた・・・

そして、同じ高校に上がつた・・・

わたし、他窪 代沙と、俺、開田 武寛は、

いま夜空に光る星を眺めている。

「いま、光っている星の数だけ宇宙があるんだ・・・

そしてその空の中には、俺たちのような人たちがいるんだ・・・

」

そういうつて彼は、私の方を抱き寄せる・・・
彼のぬくもりが私に伝わつてくる・・・

「俺の中には、代沙の血が・・・流れているんだよ・・・」

そつこつて、彼は私の頭に自分の髪を重ねた・・・。

このとき、俺は神に誓つた“一生俺は、彼女を守るんだ・・・何があつても・・・”

私は、彼を死なせない・・・この私の中に流れれる血に誓つて・・・

(後書き)

本当に、すみませんでした・・・。
事情は、はなせませんがけつこの自分のことと重ねています・・・。
最後まで、こんな長い分を読んでくださってありがとうございました。
た。

もし良かつたら感想や、評価をしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2329d/>

秋彩

2011年1月23日03時33分発行